

大学生における友人関係の親密化過程に関する研究

— 回想的調査面接による探索的検討 —

A study of close relationship process for friendships among college students: An Exploratory Study of interview for recollection

渡 辺 舞

【問題】

(1) 大学生の友人関係の特徴

青年期はそれまでの児童期と比べ、親から心理的に独立し、社会や文化の影響をより能動的に受ける時期であり、青年にとってそうした影響を強く受ける対人関係のひとつは友人関係である(宮原、1995)。近年、大学入学後の適応の問題が注目されているが、小嶋(1998)は大学生の面接から、大学生活への適応は、入学が高校時代の希望どおりだったという側面だけでなく、友人との関係や新しい環境に対して積極的に対応できるかが大きく関わってくることを明らかにした。また青年期の友人関係は、卒業、進学時にはその関係が大きく変化する可能性が指摘されている(Oswald & Clark、2003；和田、2001)。高校から大学進学時の移行時における友人関係の縦断的調査(Bohnert, Aikins & Edidin、2007)によると、移行10か月後では、協力者の半数が、新しい環境で出会った友人を親しい友人として選択した。一方で残りの半数は高校時代の友人が引き続き一番の友人であることを明らかにしている。つまり大学生の友人関係は、大学進学によって、様々な地域から学生が集まることにより、大きく変化する

と予想される。また高校時代までの友人と進路が違うために、疎遠になる可能性もあり、大学で新しい人間関係を築くことが重要となると考えられる。

さらに新たに形成される友人関係は、その以前に築いてきた友人関係の在り方が反映することも指摘されており、この点に関わって、大学入学時の友人形成の検討の際に古くからの友人(以下旧友人とする)と新しい友人(以下新友人とする)との関わりのありようの検討必要性も指摘されている(和田、2001；中村・浦、2000)。和田(2001)による入学6ヵ月後に行った調査の結果では、旧友人の方が新友人より親密であること、新友人に対しては身近な友人としての期待が現れること、また旧友人と新友人は相補的な機能を持っていることが明らかになった。

また、近年では、大学生の友人関係の特徴として、「希薄さ」「表面的」「浅い関係」が指摘されている(岡田、1995；小塩、1998)。しかしながら現代青年は、友人との深いかかわりを避けつつも、一方で孤独感や内面では親密な関係を求めていることも指摘されており(岡田、1999)、現代社会における青年期の友人関係の特徴も捉えつつ、大学入学後の大学生がどのような友人関係を形成していくのか

を検討していく必要がある。

(2) 友人関係における親密化過程研究

親密化過程 (close relationship process) とは、人と人が出会い互いに親しくなる過程である (松井、2005)。親密化過程における友人関係研究のうち、二者の親密化が関係の初期に決定されるとされる「関係性の初期分化現象 (early differentiation of relatedness; Berg & Clark、1986)」に注目した研究では、親密な関係と表面的な関係の分化を関係の初期段階から二者を追跡する縦断的な研究 (Berg、1984; Hays、1984、1985; 中村、1989; 山中、1994) によって明らかにしてきた。Berg (1984) は大学新入生の同性のルームメイトとの関係において、出会って2週間時点での関係の満足度が6カ月後の満足度や親密さを予測すること、中村 (1989) は知り会って1ヶ月後の相手との相互作用の頻度が5か月後の相手との親密さを判別すること、山中 (1994) は、友人との出会い1週間後のごく初期段階に注目し、出会いから2週間目には、関係の初期分化が生じていることを明らかにした。各研究の測定時期により分化時期の差異は見られるものの、関係形成初期の友人関係のあり方がのちのちの関係に影響を与え、親しい友人関係を形成することを示すものである。他方、関係の初期段階で、出会った友人が表面的な関係であった場合には、その後の過程で初期の人物以外の友人を選択し新たな関係を構築している可能性もあるが、単一の時点にせよ縦断的研究にせよ二者関係のみに注目した場合にはその様相が明らかにされない。友人関係は二者関係を維持するだけでなく、他の友人との関係を変化させながら維持されている可能性があり、友人関係形成初期段階から、その後の友人選択の様相を明らかにすることが求められる。渡辺・今川 (2008) は、大学新入生を対象とした友人関係の親密化過程に関する5回の追跡的調査を

行ったが、各調査時点で一番親しい友人を選択させる方略を使用し、友人が途中で変わることも含めて親密化過程を検討した。その結果、入学半年～1年後の友人選択においても、約43%の調査協力者が新友人について一番親しい友人を変更させたことを明らかにした。また、5回の調査で全て同じ友人を選択した協力者は、約25%であった。すなわち、大学に入学してから知り合った友人の中で一番親しい友人を調査時点ごとに選択させる方略では、全体の約75%の協力者が少なくとも一回以上友人選択を変化させていた。したがって大学生における友人関係の親密化過程は、複数の対人関係における状況も含めて詳細に追跡する必要性を示すものである。

(3) 友人関係における研究方法

友人関係研究や友人関係の親密化過程を明らかにしてきた研究の手法は、その多くが、質問紙法を使用している。その際、友人として「特定の個人」の特徴や協力者との関係を明らかにするために1名を想起させる方法 (山中、1994) と友人関係の全般的な特徴を明らかにするために複数の友人関係全体を想定する方法 (榎本、1999) に大別される。これらの量的な研究アプローチによって、現代の青年の友人関係の特徴やあり方が明らかにされてきたといえよう。多川・吉田 (2002) は、友人関係と恋人関係との比較から相手に対する信頼感や付き合い方における影響力は、友人関係よりも恋愛関係でより強いことを明らかにした。この結果から恋愛関係では対象となる人物との二者関係が非常に重要であるのに対し、友人関係では二者関係以外の対人関係が影響しているためではないかと指摘している。しかしながら、質問紙による手法では、複数の対人関係を網羅的に把握することに限界がある。

一方、本邦での友人関係研究における質的研究では、難波 (2005) が「仲間」の位置付

けを友達・親友との比較から面接調査の発話によって明らかにしている。また水野(2004)は、青年期の協力者が信頼できる友人をどのようにとらえているのかをグラウンデッド・セオリー・アプローチを使用し面接調査の発話から検討した。さらに、親密化過程研究における山中(1995・1998)の調査では、女性8名という小集団の中での入学3日後からの縦断的な調査の中で個々人が何を基準として友人選択を行い、その友人および、小集団内の構成員とのどのような関わりを行っているかを面接調査と好意度評定と行動頻度で質的なアプローチを試みている。その結果、面接調査からは、関係のごく初期段階で特定の人とのインフォーマル・グループを形成していること、親しい人物と関係成立に関して何らかの類似性を理由としてあげており、将来の関係の親密可能性がごく初期段階に決定されてしまう可能性を示唆した。以上のように友人関係研究において、本邦では質的にアプローチした研究は少ないが、量的研究では捉えきれない詳細な描写を可能としてきた。質的研究では、協力者数の確保やその分析方法の煩雑さ、また結果における一般化や理論化の難しさという問題点を抱えているが、一方で、現実に着したいきいきとした情報を含んでいることが長所である(やまだ、2004)。先述の通り、友人関係は複数の対人関係の相互作用が重要であり、また、親密化過程の詳細を明らかにするためにも質的アプローチは有用な手法であると考えらる。

【目的】

以上の議論を踏まえ、本研究の目的を述べる。

①大学生の友人関係の親密化過程について友人との出会いから現在までの状況を時間の推移に従って明らかにするために回想的調査面接を実施し、親密化過程の分類を試みるこ

とである。その際、複数の友人関係も含めてその過程を捉えていくことを第1の目的とする。

②調査協力者が選択した友人との親密化過程を回想後に、現段階でどのような存在として捉えているのかを面接調査による発話から検討することを第2の目的とする。具体的には一番親しい友人の選択の差異(新友人である場合と旧友人である場合)によって、新友人の捉え方に差異があるかを検討する。さらに、一番親しい友人が新友人である場合と旧友人である場合において、一番親しい友人としての差異が見られるかを検討する。

【方法】

調査協力者

31名(男性7名・女性24名)の大学4年生であった。平均年齢は21.87歳($SD=.62$)であった。

調査時期

2008年7月・9月。面接は個人面接で行い、面接録音時間は17分～43分であり、調査の所要時間は30分～60分程度であった。面接内容は協力者の許可を得て録音し、逐語録は調査者自身が面接終了後に起こした。

手続き

①現在付き合いのある中で一番親しい同性友人を一人想起させ、その友人との出会いから、現在の関係までを時間の経過に従い回想させた。その際、協力者と選択友人を含めた共通の友人関係が確認された場合には、複数の関係を含めた友人関係を回想させた。

②調査協力者が、新友人を一番親しい友人として想起した場合には、その親密化過程について現在の状況まで追跡させ、調査を終了とするが、旧友人を一番親しい友人として想

起した場合には、その友人との親密化過程を回想させた後に、新友人一名（同性友人）を想起させ、同様の手続きで親密化過程を回想させた。なお、旧友人に関する発話のうち、親密化過程分類に関する回想部分は、本研究では使用しない。

共通質問事項

①今現在付き合いのある中で一番親しい友人（大学に入ってから知り合った一番親しい友人）の選択②最初に出会った時期③最初に出会った場所④最初に出会った時の状況（場面）⑤最初に交わした言葉⑥最初の印象⑦選択友人と協力者を含めた共通の友人関係の有無と人数⑧仲良くなったきっかけ⑨グループでの付き合いが話の中心の場合、その友人を選んだ理由⑩今後の付き合い予測⑪友人の選択理由・存在⑫選択友人の他の友人との差異以上の共通質問事項以外は、協力者の回想に従い、必要と思われる確認事項について調査者が面接調査中に質問を加えていく方略を採用した。

【結果】

(1) 一番親しい友人の選択と所属及び友人関係形成時期

一番親しい友人として大学入学後の新友人を想起した協力者は19名であり、このうち18名は、大学入学当時に出会った友人を選択した。残りの1名は大学3年時の12月に知り合った友人を選択した。大学入学前に知り合った旧友人を想起した協力者は12名であった。旧友人との出会いの時期は小学生・幼稚園・保育所時の友人（7名）、中学時の友人（1名）、高校時の友人（4名）であった。

本報告では、新友人との親密化過程31事例を分析対象としたが、協力者の選択した新友人は同大学同学科内（22名）が最も多く、他学科（2名）、部活・サークル内（5名）を含

めると、94%の協力者が、一番親しい新友人として、同じ大学内の友人を選択した。その他の2事例では、アルバイト先の友人を選択していた。

次に友人との関係が出会いの直後から進展した事例と、初期の出会い時には、友人関係に発展しなかった事例を発話から判定した。その結果、初期の出会い時には、友人関係に発展しなかったが、ある時期のきっかけ（出来事）から友人関係が始まったケースが11事例確認された。本研究では、以下の親密化過程の分類について、選択した友人との関係がスタートして以降の内容を分類に採用していく。

(2) 回想的調査面接における親密化過程の分類

友人関係が形成された後の親密化過程の分類について、①共通友人の有無、②選択友人と共通友人の関係スタート時期の確認、③選択友人及び共通友人との関係変化をもたらした出来事の有無、④グループ関係成立後における選択友人と共通友人の行動・経験の共有の差の4点をチェック項目とした（Figure1参照）。4点の設定については、逐語録から、協力者別に時間的推移に従いマトリクスを作成し、上記の4項目を抽出した。この4項目については、筆者と指導教員、及び同研究室内の大学院生（4名）の合議によるものである。以下に結果の詳細を記す。

(2)－1 共通友人の有無（判定1）

大学に入学してから知り合った友人の中で現在付き合いのある一番親しい人物を一人選択させた後、その友人と協力者の共通の友人の有無を尋ねた。共通友人がいないと回答した協力者は3名であった。共通の友人がいると回答した協力者（28名）の友人数（選択友人は除く）の平均人数は3.54（SD=1.64）人であった。

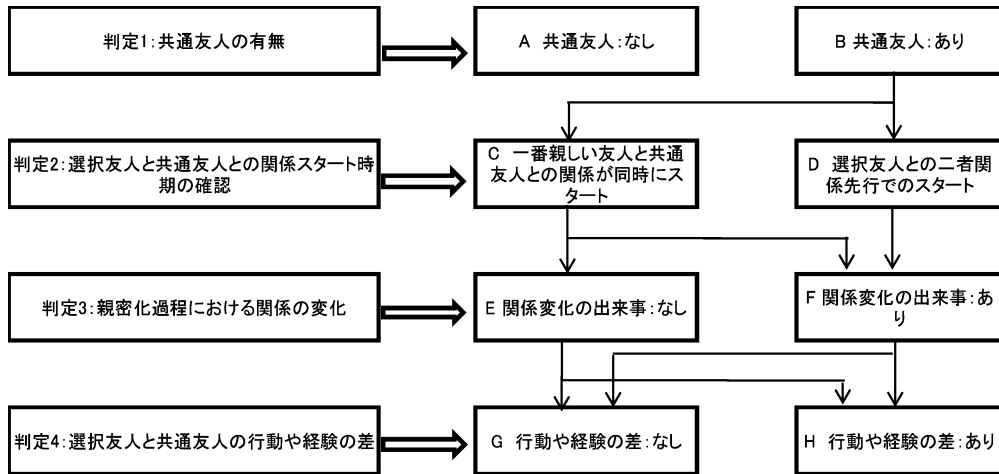


Figure 1 親密化過程の判定項目

(2)-2 協力者と選択友人との友人関係形成時期の確認（判定2）

選択友人と共通する友人関係があると回答した28名の協力者について、友人関係形成時期に差異があるかを発話から分類した。その結果、協力者28名中18名は、一番親しい友人と共通友人との関係が、同時期にスタートしていることが確認されたが、残り10名の協力者は、一番親しい友人との二者関係が先行してスタートし、共通友人と「共通の授業」「サークル・部活内の出来事」「飲み会・学外での付き合い」等の出来事を経て共通の複数友人関係として成立したことが確認された。

(2)-3 協力者と選択友人との関係変化をもたらしした出来事の有無（判定3）

選択友人と共通する友人関係があると回答した28名の協力者について、友人関係が変化する出来事やエピソードがあるかを発話から分類した。その結果、28名中6名は、選択友人と共通友人との関係がスタートした後、その関係が変化するような出来事が確認されず、出会いの段階から、現在まで関係が維持されていた。一方で残り22名の協力者は、選択友人との関係スタートから現在までの過程において、共通友人関係を含む関係の変動が

確認された。その関係変動に関連した出来事エピソードとして「共通の授業・演習・実習（8事例）」「サークル・部活内のイベント（6事例）」といった、学科や学内の活動や経験が多く抽出された。その他「飲み会・誕生日会・学外の付き合い（4事例）」の経験が友人関係を変化させるきっかけとなった事例も確認された。

(2)-4 グループ関係成立後における選択友人と共通友人との行動・経験の共有の差（判定4）

選択友人と共通する友人関係があると回答した28名の協力者について、選択友人とだけ共有する行動や経験があるかを発話から分類した。その結果、28名中14名は、選択友人と共通友人との関係がスタートした後、常にグループとしての行動が主であり、選択友人と共通友人との行動や経験に差が確認されなかった。一方で残り14名の協力者には、共通の友人関係のほかに選択友人とだけ共有する行動や経験を有している認知があることが確認された。

(2)-5 親密化過程の分類

以上の4つの判定項目の組み合わせによ

り、親密化過程を7類型に集約した。分類名と各分類の定義をTable 1に示す。また、「II：グループ関係維持型」の事例をTable 2に、「VII：二者先行中心グループ関係変動型」の事例をTable 3に示す。

「II：グループ関係維持型」の事例における協力者は女性であり、自宅からの通学者である。一番親しいと選択した友人(A)と入学直後のオリエンテーションで出会い、同時期に共通友人3名とも友人関係をスタートしている。出会い以後の過程において、常に5人での付き合いや行動が優先されており、5人の関係の変化を引き起こす出来事やエピソードは抽出されなかった(Table 2 参照)。

「VII：二者先行中心グループ関係変動型」の事例における協力者は、女性であり、自宅からの通学者である。一番親しいと選択した友人(A)と入学直後のオリエンテーションで出会い、1年次の付き合いは二者関係が中心である。2年生の学科の必修授業や演習授業

でレポートや課題に協力して取り組んだことで、8人のグループ関係が形成されたと認知していた。グループの関係が形成された後も一番親しい友人(A)とは、学外の付き合いや共通するアルバイト等で共通友人との行動とは別の2人だけの行動を認知していた(Table 3 参照)。

(3) 選択した友人に対する認知

本研究では、選択友人と共通友人を含む親密化過程を回想してもらった後に、選択した友人をどのような存在であると捉えているのかを、面接調査の発話から抽出した。協力者には面接開始時に一番親しい友人を1名想起してもらったが、31名中12名が旧友人を選択している。手続きの通り旧友人を選択した場合には、新友人についての過程も回想してもらっており、以下の分析は協力者が一番親しい友人を旧友人と回答した場合には、旧友人と新友人についての発話を分析対象とし、

Table 1 回想的調査面接による大学生の友人関係に関する親密化過程分類

分類名(判定記号)	定義	事例数
I：二者関係専心型(A)	出会いから現在の関係まで、選択友人との関係のみが確認された型	3
II：グループ関係維持型(BCEG)	選択友人と共通友人の関係が同時期に成立し、その後関係が変化せず、グループ関係が継続している型	5
III：二者中心グループ関係維持型(BCEH)	「IIグループ関係維持型」と同様の過程であるが、過程の中で選択友人とだけの経験や行動の共有がある型	1
IV：グループ関係変動型(BCFG)	選択友人と共通友人の関係が同時期に成立したが、その後友人関係の変化が確認される型	6
V：二者中心グループ関係変動型(BCFH)	「IVグループ関係変動型」と同様の過程であるが、過程の中で選択友人とだけの経験や行動の共有がある型	6
VI：二者先行グループ関係変動型(BDFG)	選択友人との出会いから、二者関係が成立した後にグループ関係が確認される型。	3
VII：二者先行中心グループ関係変動型(BDFH)	「VI二者先行グループ関係変動型」と同様の過程であるが、過程の中で選択友人とだけの経験や行動の共有がある型。	7

() 内のアルファベットはFigure 1の判定項目の組み合わせを示す。

新友人を一番親しい友人だと選択した場合には、新友人に対する発話のみを分析対象とした。

逐語録から「①友人のパーソナリティや人物像に関する発話」「②協力者との関係に関する発話」「③友人との行動内容に関する発話」の観点に分類し、協力者別のマトリクスを作成した。Table 4・5・6に各カテゴリすべてに発話を確認された協力者の事例を示す。全協力者についてマトリクスを作成後、友人選択別の各友人に対する発話内容を抽出し、出現数を一覧表にまとめた (Table 7 参照)。

(3)-1 一番親しい友人の選択別の「新友人」に関する発話比較

一番親しい友人として新友人を選択した群 (Table 4) と旧友人を選択した群 (Table 5) において、「新友人」をどのような存在ととらえているのかを発話から比較した (Table 7)。

「①友人のパーソナリティや人物像」については、一番親しい友人の選択にかかわらず、「新友人」について、大学生活における「大切な存在」であり、自分と比較し「似ている・違った存在」であることに関する発話が共通して抽出された。また新友人を一番親しいと選択した群では新友人を「個性的・刺激的な存在」として認知している傾向が多く見られた。

Table 2 グループ関係維持型 (II型) の事例 (女性：自宅生)

質問内容	協力者の発話	判定項目
出会いの時期 友人属性 出会った時の出来事・言葉 出会った時の印象 出会いの直後状況	オリエンテーションの時 同学科内 最初は何も話していません。 活発な感じの印象 宿泊オリエンテーションでした。それで、話す機会があって仲良くなりました。	
現在の共通友人の有無	私とAさん以外に3人 (B/C/D) います。	➡ 判定1：共通友人あり
出会い以後 (1年生) の共通の友人関係状況	Aさんに限らず5人で授業を受けるようになりました。	➡ 判定2：選択友人と共通友人との関係が同時期にスタート
Aさんと2人で行動することは？	5人ですね。誕生日に御飯を食べに行ったりですね。	➡ 判定4：選択友人と共通友人との行動や経験の差異はない。
2年生	レポートなんかはチーム分けがされていて、それでバラバラになることはあるんですが、その前後で実験の情報交換をしたりということがありました。	
3年生	体育大会…球技大会に参加したり、学祭も参加し、親睦会という感じで一泊したことがありました。	
4年生 (現在)	福祉に進んだのが3人、取らなかった人が2人で…そこで、ちょっと別れた感じがあります。	
	5人の付き合いというのは続いていました。結構、月に1回とかは必ずみんなで集まって遊ぶ機会をつくっていました。	➡ 判定3：関係変化の出来事なし
	あまり、(変化は) ないですね。3年生からの流れで…より授業で顔を合わせる機会や学校に来る機会がなくなって、3年生の時は食堂に集まって、ご飯食べていましたが、今はそうということがなくなりました。	
	少し頻度は減ってしまっていますが、でも、結構みんなで集まろうという意識がみんな強いかなと思います。	
卒業後の付き合い予測について	バラバラになるかなと思います。今までは、誕生日とか、試験終わりとか集まっていたけど。これからはみんなが休める時、お盆とかお正月とかになってしまうのかな	

註) 親密化過程の分類に関連する発話のみを一部抜粋

「②協力者との関係に関する発話」では、旧友人が一番親しいと選択した群では、「新友人」との関係について「割り切った関係」「表面的な関係」「大学の中だけの関係」であるという浅い関係を認知している傾向があるのに対し、新友人が一番親しい友人だと選択した群では、「楽な関係」であることに加えて「本

音を話す関係」「影響力を与えあう関係」「気が合う関係」等、「新友人」と深い関係だと認知している発話が多く抽出された。

「③協力者との行動内容に関する発話」では、一番親しい友人の選択状況にかかわらず、「多くの時間を一緒に過ごしたこと」「部活や授業の課題を一緒に経験したこと」等、学校

Table 3 二者先行中心グループ関係変動型（Ⅶ型）の事例（女性：自宅生）

質問内容	協力者の発話	判定項目
出会いの時期 新 出会った時の出来事・言葉 出会った時の印象 出会いの直後状況	オリエンテーション 同学科内 隣に座ってもいいですかと私から声をかけました。 かわいい人 同じ学科の人だということがわかったので、それから移動する ときも一緒にいるようになりました。そこからすごく仲良く	
現在の共通友人	たくさんいます。8人のグループなんです。 ➡	判定1：共通友人あり
出会い以後（1年生）の共通の友人関係状況	Aさんと出会ってから、しばらくは2人でいました。そのうちに英語で一緒の子だったり、他の授業で一緒だったり、個々につながって行って、各自が仲良くなっていったので、いつのにか、大きなグループになった感じで（後略） ➡	判定2：選択友人との二者関係が先行
1年生	(Aさんと)ほとんどが一緒でした。一緒に履修を考えたりもしたので。サークルも一緒に入って、バイトも一緒です。生活も学校生活も一緒のことが多い。	
出会い時以外の共通の友人 関係状況 2年生	完全に（グループが）友人関係だと認識したのは2年生。一緒に行動するようになったのは2年生以降だと思います、 Aさんとは、特に変わったことはない。サークルは2年生の時にやめてしまいましたが、バイトは今でも一緒に続けています。 その他のメンバーとは1年生の時に、共通の授業で一緒だったというつながりはあったんですが、このメンバーがグループで仲がいいなと思ったのが、心理の必修や実験演習のレポートを一緒にやったことがきっかけかもしれません。みんなで、見せ合ったり、情報交換をしていたので。 Aさんとの付き合いが中心でしたが、みんなに飲みに行く回数やみんなの誕生日にお祝いすることも増えました。 ➡	判定3：関係変化の出来事あり
3年生	Aさんとはゼミが違う。（中略）Aさんとの付き合いは、バイトが一緒だったこともあり、バイトもバイトの中で、またとても仲がいい仲間がいます。だからAさんとの関係はあまり変化がない。一番仲がいいのはAさん。 ➡	判定4：選択友人と共通友人との行動や経験の差異がある。
4年生（現在）	Aさんと話すことが減ってしまった。Aさんは一般就職なので、就職活動が忙しかった。なかなか会えなくなったことで、さみしくなったという気持ちはある。でもたまに2人で時間をつくって遊ぶこともある。みんなとも基本は会うことはない（後略）。	
未来予測	Aさんとはこれからも変わることがないと思っています。今でも、時間が合わなくて、連絡を取らなくなってしまっているという感覚…自信がある。Aさんもそう感じてくれているように思う。これからも連絡を取っていく関係だと思います。グループは、なかなか会えなくなるのかな…と思っています。	

註）親密化過程の分類に関連する発話のみを一部抜粋

生活やアルバイトでの経験の共有に関する発話が多かった。また、新友人が一番親しいと選択した群では、「新友人」と「悩みを相談し合う」「アドバイスや質問に的確に答えてくれる」といった活動の共有に加えて、より内面的な付き合いを想像させる行動内容が多く抽出された。

(3)-2 一番親しい友人としての「新友人」と「旧友人」の発話比較

一番親しい友人が「新友人」である場合 (Table 4) と「旧友人」である場合 (Table 6) においてその発話に差異があるのかを発話から検討した (Table 7)。

「①友人のパーソナリティや人物像」につい

ては、「新友人」・「旧友人」とともに「大切な存在」であることが共通して抽出されたが、「新友人」については「個性的・刺激的な存在」であること、「旧友人」については「不動の存在であること」や「自分の理解者」といった新友人よりも近い存在として捉えている発話が多く抽出された。

「②協力者との関係に関する発話」では、新友人については「本音を話す関係」といった深い付き合いを想像させる発話のほかに、「自然な付き合い」「楽な関係」であることが特徴として抽出された。一方「旧友人」については、その関係が「会わない時間を感じさせない関係」「これからも継続される関係」であることを確信した発話が多かった。

Table 4 新友人が一番の友人であると認知した群の「新友人」に対する発話

NO	新友人のパーソナリティや人物像に関する発話	協力者との関係に関する発話	新友人との行動内容に関する発話
A (女性)	私とよく似ている。第一印象から、どんどん自分に近い存在に思えてきた。	良く相談し、話しあう関係	自分に悩みがあるときに、アドバイスをくれる。そのアドバイスが的確で相談しやすい。彼女も私に相談してくれる。
B (女性)	今までの友人とは違う存在 私をほめてくれ、優しくしてくれる。いいところを評価してくれる人 やっていることが幅広くて、刺激的な存在	本音で話せる関係になった。 お互いに影響し合っていると実感できる関係	ストレートに考えや思いを伝えてくれた。
C (女性)	(この友人と)出会えていなければ、こんなに大学生活が楽しくなかったかもしれないと思う大事な存在	出会うべくして、出会った関係。運命的のといふと大げさだけど、そういう感じがする。	一緒に行動することが増えたことで、大学生活がより充実したものになった。

Table 5 旧友人が一番の友人であると認知した群の「新友人」に対する発話

NO	新友人のパーソナリティや人物像に関する発話	協力者との関係に関する発話	新友人との行動内容に関する発話
D (女性)	大学を楽しむための友人 大学内の大切な人	大学生活を充実させたいしより潤滑にするために、集まって楽しい思い出をつくる関係。 本当の友人と大学の友人を分けた割り切った付き合い。	学校以外は基本的に会わない。 必修の授業は一緒
E (女性)	自分とは違う存在だが、魅力的に感じる人 自分にはないところを持っている…憧れに近い感じ見習いたいと思う人 自分とは正反対の考え方や性格で、刺激的な存在	違う人間として認めることができる関係	接点が多かった。一番話やすかった。
F (男性)	落ち着く存在	深い話をしない割り切った関係 (大学生活を通して) 変わらない関係	就職のこと、学科や授業のことを話す。

Table 6 旧友人が一番の友人であると認知した群の「旧友人」に対する発話

NO	旧友人のパーソナリティや人物像に関する発話	協力者との関係に関する発話	旧友人との行動内容に関する発話
G (女性)	自分のことを一番受け止めてくれる人 自分に近い存在…魂の友達	一番自分に近い関係	お互いに相談しあえる。
H (男性)	友達というニュアンスと違う…普段は空気	思い出と一緒に作る関係ではない。 何か辛いことを乗り越えてきたわけではないが、何があったも崩れない関係 関係が変わるということが考えられない。	小さいころから一緒に時間を過ごしてきた。 お酒が入ると深い話もする。お正月には必ず会う。
I (女性)	私のことをよく知っていて、性格的に似ている人	久しぶりに会っても久しぶりって感じがしない 会えば楽しい関係 兄弟みたいな感じ	高校時代からいろんな悩みを相談してきた 自分に何かあれば、一番に相談する。 同じもの、部活とかを共有してきた。

「③協力者との行動内容に関する発話」では、新友人と同様に「旧友人」との行動内容も、「お互いの悩みを相談しあうこと」が共通して多く抽出された。

【考察】

(1) 回想的調査面接による大学生の友人関係と親密化過程

本研究では、一番親しい友人の選択をさせたが、大学に入学して3年以上が経過した4年生においても、協力者の40%程度が旧友人を一番親密だと認知していることが確認された。また一番親しい友人としての旧友人に対する発話からはその友人について崩れることのない信頼関係を認知している傾向があるのに対し、この群における新友人に対する発話では、浅い表面的な関係を認知している傾向が確認された。この結果は和田（2001）らが指摘するように新たに形成される友人関係は、その以前に築いてきた友人関係の在り方が反映することを本研究においても支持する

ものであり、その影響力が、大学卒業まで半年と迫った時期においても持続することを示すものである。

大学生の友人関係における親密化過程では、初期の出会いから、すぐに友人関係に発展しないケースも抽出された。これらの協力者の多くが大学1年次には、他の友人関係が存在したケースや、友人関係が模索中である様子が面接の発話から伺われた。つまり、友人関係の親密化過程研究において、出会いの初期の状況の推移を追跡にするに留まらず、大学生活全般における継続的な調査が必要であることを示すものである。

本研究の結果、多くの協力者が選択友人と共通の複数の友人関係を認知していることが確認された（90%：Ⅱ～Ⅶ型）。また選択友人と共通友人との関係がその過程において「学科のカリキュラム」や「サークル・部活動」等の経験の共有を通して相互に影響しあいながら親密化していく過程が確認され、多川ら（2002）の指摘の通り、友人関係研究において、複数の対人関係を追跡する必要性を示す結果

Table 7 友人選択別及び新友人・旧友人に対する発話内容の出現数

新友人選択群 (19 名)			旧友人選択群 (12 名)			
新友人に対する発話		n	新友人に対する発話		n	旧友人に対する発話 n
人物 ソナ リティ	個性的・刺激的な存在	6	大学生活において大切な存在	4	特別・大切な存在	3
	自分と似た存在	6	自分と似た存在	3	不動の存在	3
	自分と違った存在	6	自分と違った存在	3	自分の理解者	3
	大学生活において大切な存在	5	憧れ・見習いたい存在	2	自分と似た存在	3
	自分の意見を持っている存在	4	大学を楽しむ存在	2	自分と違った存在	1
	楽しさ・面白さがある人	4	自分の意見を持っている存在	1	個性的・刺激的な存在	1
	思いやり・優しさのある人	3	個性的・刺激的な存在	1	空気のような存在	1
	安心・信頼感のある人	2	明るい人	1	自分に近い存在	1
関係 性	楽な関係・自然な関係	5	表面的な本音を言わない関係	6	会わない時間が問題にならない関係	7
	本音で話せる関係	3	大学生活を通して変化しない関係	3	崩れない・変わらない関係	4
	気が合う関係	2	大学内だけの関係	2	一緒にいて楽しい関係	4
	運命的に出会った関係	1	楽な関係・自然な関係	2	兄弟のような関係	3
	お互いに影響し合える関係	1	バランスがとれている関係	1	自然な関係	2
	長く続く関係	1	お互いの違いを認められる関係	1		
	表面的な関係	1				
行 動	悩みの相談をし合う	10	悩みの相談をし合う	4	悩みの相談をし合う	9
	一緒に行動する時間が多い	9	一緒に行動する時間が多い	3	一緒に行動する時間が多い	4
	サークル内の問題を乗り越えた	1	テスト・レポートの協力をする	2	楽しい話をする	3
			頻繁な付き合いはない	2	頻繁な付き合いはない	2

である。

次に選択友人との出会いから関係に変化なく、継続的な友人関係である事例（23%：Ⅰ～Ⅲ型）が確認された一方で、その他事例（Ⅳ～Ⅶ型）では、関係スタートから、学科のカリキュラム、実習、就職、卒論等の経験や友人関係の中での出来事によって、その関係が変動し、現在に至っている過程が明らかにされた。これらの関係変動は、大学入学直後に限らず、大学3年～4年時の就職活動での情報交換や就職の方向性等でも確認されており、友人関係が安定して確立され、そのまま維持されていく過程と、卒業間近まで様々な経験の中で友人関係が変動する過程の両方の事例が確認された。

さらに友人関係の親密化過程では、共通友人を含むグループ関係が認知されている中で、選択友人との特別な経験や行動も有している事例（45%：Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ型）も確認された。面接時に一番親しい友人を選択する際に、二者関係だけでの経験の共有を認知している協力者は、選択についての判断に迷いが見られなかったが、常にグループでの関係を認知している協力者の中には、そのグループ関係の中から一人を選択することが難しいと感想を述べる協力者もいた。友人関係における追跡的研究（Berg、1984；Hays、1984、1985；中村、1989；山中、1994）の多くは、初期の調査で選択した友人を固定しその推移を検討しているが、本研究において回想的面接調査の手法を適用したところ、親密化過程において、選択友人と共通友人との経験や行動の差異の有無が、協力者の「友人選択」にも影響を与えている可能性がある。

（2）協力者が捉える「親しい友人」とはどのような存在なのか？

友人選択によって「新友人」に対する認知に差があるかを検討したところ、大学生活を3年半経過した段階で、新友人が一番親しい

と選択した群では、旧友人が一番親しいと選択した群に比べて、「新友人」との関係が活動の共有や悩み事を相談といった経験を通して、より深い関係に進展していることが伺える発話が多く抽出された。一方で、旧友人が一番親しいと選択した群では、新友人について大学内での時間を共有する限定的な存在という認知が見られた。この発話の背景には、旧友人との現在の関係や付き合い方が影響していると考えられ、新友人との親密化過程は、旧友人との大学入学後の付き合い方や旧友人との関係認知が影響を与えている可能性がある。

次に、一番親しい友人として選択された「新友人」と「旧友人」に対する発話の差異を検討した。新友人と旧友人には、付き合い期間の差異があり、友人の人物像や関係については旧友人が新友人よりも深い関係であることを想像させる発話が多く、異なった認知がみられた。しかしながら、行動面については、「お互いの悩みを相談し合えること」や「時間の共有」が共通内容として多く抽出されており、このことが一番親しい友人と選択される基準の一つとなっている可能性がある。

【今後の課題】

本研究では、回想的調査面接にて使用することで、複数の対人関係を同時に回想させ、友人関係が変動する過程も含めて大学生活における友人関係の親密化過程の詳細をとらえることを可能とした。しかしながら一方で課題もある。

第一に、本研究の協力者は31名であり、大学も学科も全て同じ協力者であった。また大学生を対象とした友人関係研究では、関係の中で友人に望むものには性差が存在し、男性では女性よりも一緒に行動するという「共行動」を重視し、女性では男性よりも悩みを打ち明けるといった「自己開示」や互いに甘え

られるといった「相互依存」を重視することを明らかにしている(和田、1993)。本研究では、男性のデータが少なく、性差の比較検討ができなかった。友人関係に対し重視する側面に性差が存在することは、親密化過程においても影響する可能性がある。したがって今後の課題として、データ数を増やすことや他大学や同学科以外の協力者のデータも必要であると考えられる。

第二に、親密化過程について本研究では、「現在付き合いのある中で一番親しい友人」を想起させたうえで、出会いからのエピソードを回想してもらう手法を採用した。したがって、回想における記憶の曖昧さや歪みがあることは否定できない。今後の課題として、時点毎の友人関係の様相を捉える測定(量的データ)と本研究で採用した回想的調査面接(質的データ)による統合的なデータによる検討が望まれる。

第三に、回想的調査面接によって抽出された大学生の友人との親密化過程では、大学生活での様々な経験(サークル・実習等)がその過程に大きく関与していた。したがって大学生の友人関係の在り方が、大学生活全般の満足感や適応感に影響すると考えられ、今後は親密化過程と大学生活との関連を検討してことが望まれる。

付記

本研究の一部は日本心理学会第73回大会および日本社会心理学会第50回大会・日本グループダイナミクス学会第56回大会合同大会にて発表された。本論文をまとめるにあたり、熱心なご指導・多くのご助言をいただきました今川民雄教授に厚く感謝申し上げます。また調査にご協力いただきました北星学園大学の調査協力者の皆様、及びデータ分析にご協力いただきました今川研究室所属の大学院生にも心から御礼申し上げます。

引用文献

- Berg, J. H. (1984). Development of friendship between roommates. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46 (2), 346-356.
- Berg, J. H. & Clark, M. S. (1986). Differences in social exchange between intimate and other relationships: gradually evolving or quickly apparent? In: J. Derlega & B. A. Winstead (Eds) *Friendship and social interaction*, New York: Springer-Verlag, pp101-128.
- Bohnert, A. M., Aikins, J. W., & Edidin, J. (2007). The role of organized activities in facilitating social adaptation across the transition to college. *Journal of Adolescent Research*, 22 (2), 189-208.
- 榎本淳子(1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の変化、教育心理学研究、47 (2)、180-190。
- Hays, R. B. (1984). The development and maintenance of friendship. *Journal of social and personal relationships*, 1 (1), 75-98.
- Hays, R. B. (1985). A longitudinal study of friendship development. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48 (4), 909-924.
- 小嶋明子 (1998). 高校から大学へ 会沢勲・石川悦子・小嶋明子(編著) 移行期の心理学——こころと社会のライフイベント——ブレーン出版 pp 115-146。
- 松井豊 (2005). 親密化過程 中島義明・繁枳算男・箱田祐司(編) 新・心理学の基礎知識 有斐閣ブックス pp 372-373。
- 宮下一博(1995). 青年期の同世代関係 落合良行・楠見孝(編) 講座生涯発達心理学第4巻 自己への問い直し: 青年期 金子書房 pp 155-184。
- 水野将樹(2004). 青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか: グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成 教育心理学研究 52 (2)、170-185。
- 中村雅彦(1989). 大学生の友人関係の発展過程に関する研究(Ⅰ)——関係性の初期分化に関する検討——日本グループダイナミクス学会第37大会発表論文集、65-66。
- 中村佳子・浦光博 (2000). ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について——対人関係の継続性の視点から——社会心理学研究、15 (3)、

151-163。

難波久美子(2005)．青年にとって仲間とは何か：対人関係における位置づけと友だち・親友との比較から 発達心理学研究 16(3)、276-285。

岡田努(1995)．現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究、43(4)、354-363。

岡田努(1999)．現代大学生の友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究、47(4)、432-439。

小塩真司(1998)．青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連、教育心理学研究、46(3)、280-290。

Oswald, D., & Clark, E., (2003). Best friends forever?: High school best friendships and the transition to college. *Personal Relationships*, 10(2), 187-196.

多川則子・吉田俊和(2002)．親密な人間関係が対人関係観に及ぼす影響 ― 青年期の恋愛関係と友人関係 ― 対人社会心理学研究、2、65-73。

やまだようこ(2004)．質的心理学：創造的に活用するコツ 無藤隆 やまだようこ 南博文 麻生武 サトウタツヤ(編)第1章 2 質的研究の核心とは 新曜社 pp 8-13。

山中一英(1994)．対人関係の親密化過程における関係性の初期分化に関する検討 実験社会心理学研究、34(2)、105-115。

山中一英(1995)．対人関係の親密化過程に関する質的データに基づく一考察 名古屋大学教育学部紀要、42、127-134。

山中一英(1998)．大学生の友人関係の親密化過程に関する事例分析的研究 社会心理学研究、13(2)、93-102。

和田実(1993)．同性友人関係、その性および性役割タイプによる差異、社会心理学研究、8(2)、67-75。

和田実(2001)．性、物理的距離が新旧の同性友人関係に及ぼす影響心理学研究、72(3)、186-194。

渡辺舞・今川民雄(2008)．大学新入生の新旧友人関係に関する追跡的研究(3) ― 新旧友人の人物選択状況の違いが親密度得点の推移に及ぼす影響 ―、日本心理学会第72回大会論文集、126。